

平成12年7月10日

気 象 庁

有珠山の火山活動に関する火山噴火予知連絡会統一見解

有珠山では、北西山麓の金比羅山火口群と西山西麓火口群で水蒸気爆発が続いていますが、深部からのマグマの供給はほぼ停止しており、火山活動は徐々に低下していくものと考えられます。

一連の噴火活動は、深さ約10kmの深部マグマだまりから、深さ4～5kmの浅部マグマだまりに、噴火開始の直前にマグマが上昇してきたことにより始まったものと推定されます。さらに、この浅部マグマだまりから一旦上昇したマグマは、北西に向けて移動し、地盤の隆起と2つの火口群からの噴火を起こしてきました。

地盤の隆起は現在も西山西麓で続いているですが、一定の割合で鈍化しています。中心部の隆起速度は1日5cm程度になり、隆起域も狭くなりつつあります。5月中旬以降、山体の大部分では、変動方向が反転して沈降傾向になっています。この事実は、北西山麓の下に貫入したマグマの一部がさらに浅部に移動していく過程に対応するものと理解できます。更に広域の変動がほぼ停止していることから見ても、深部マグマだまりからの供給はほぼ途絶えた状態にあると考えられます。

噴火開始当初の噴煙にはマグマ起源の物質が多量に含まれましたが、その後噴火は水蒸気を主体とする活動に移行し、噴煙の高度、爆発力、熱エネルギーは減少傾向にあります。最近、西山西麓火口群は間欠的に火山灰を噴出し、爆発力は弱くなっています。また、西山西麓火口の周辺には、熱水・噴気活動域の拡大が認められます。金比羅山火口群は空振・爆発音・噴石を伴って頻繁に爆発していますが、その活動度は最近低下してきました。噴石の落下範囲は、この1ヶ月ほどは、火口から少なくとも300m程度となっています。

地震活動は主に南西山麓で続いているですが、その規模・回数は徐々に低下しつつあります。

以上のように、深部からのマグマの供給はほぼ停止しており、一連のマグマの活動は終息に向かっていると考えられます。

今後、火砕サージを伴うような爆発性の強い噴火はないと考えられます。しかし、現在までに上昇してきたマグマが熱を供給し続けていることから、当分の間、現在と同様の爆発が両火口群で継続すると考えられ、火口から500m程度の範囲では、噴石や地熱活動に対する警戒が必要です。